

## 地域研究

令和6年12月1日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

### はじめに

別子銅山を読む講座は、別子銅山記念図書館に収蔵している図書の解説に始まり、別子銅山に関する事項の解説に及んできたが、形態はあくまでも文献研究である。令和5年に西条史談会で「地域研究について」と題して話したことを新居浜編で語ってみる。

地方での地域研究において一次史料を使っての研究は、地元に残っている古文書や古図を読むことが中心になる。又は民間伝承の採取である。多くは既に書かれた文献研究をするだけである。別子銅山については多くの著作があるので、大半は別子銅山記念図書館の館蔵書籍での文献研究となる。個別の古文書で、ある時代の地域の断面を明らかにすることはできるが、事象の全国的な位置づけができないまま終わることが多い。民間伝承についても時間の経過で内容が意味不明なまま伝えられ、内容がわからなくなって来たりしている。全国的視点での類似研究が不可欠となる。

これらの二次史料の使い方、二次史料を使っても、地元の利を生かすと新たな発見が生まれる。①別子銅山の第二次泉屋道は使われなかった。②別子銅山の第一次泉屋道の道筋を特定。③地名の「石ヶ山丈」の解明。④立川銅山の中宿の位置の特定。⑤横たえた梯子をまたげないの解明。⑥清水総右衛門が開いた土地の所在。⑦新居浜市の海岸線の復元。

白紙に戻して最初から考察を仕直すと読み解けてくる。①「かぶと峯」の解説。②「端出場」<sup>たかぼし</sup>「高橋」の考察。

市内での一次史料からもアプローチできる。①新居浜市鳥瞰図の作成年の特定。②古写真や絵図の解説。③山口誓子の吟行を辿る。④広瀬幸平の漢詩を読み下す等。

井戸の中の蛙にならないために、広域で見えていく。①武国凝別命は伊曾乃神社の祭神など。②白水丸の購入。(断層も、岡村断層は西条市から新居浜市に続いているが、小松断層、大谷断層、馬淵断層、東田断層と途切れている。しかし、西条市から新居浜市へと見ていくと続いている。)

### 1. 解説講座で手引きづくり

#### ①「別子銅山を読む講座」での解説

新居浜市立別子銅山記念図書館は「名は体を表していない」。国の補助事業の健康支援や雇用支援コーナーはあるが、肝心の別子銅山コーナーがない。別子銅山に関する本は、図書100分類法で仕分けをするから、郷土資料、地域資料、鉱山、林業、交通運搬、社会、風俗文化、泉幸吉文庫、雑誌などに分散する。上下の分冊本になると別の棚に分かれることすらある。

閉架の書庫には、傷んだ時の交換用の寄贈本が複数冊眠っている。図書館の入り口正面に別子銅山コーナーを特設して、眠っている別子銅山関係図書を並べた。300冊は並んでいる。

別子銅山コーナーの中の基本図書を解説する「別子銅山を読む講座」を解説して、14年間で83点の図書と項目を解説することになる。内66点を一人で解説したところであるが、これらの資料は、これから図書館で別子銅山関係の本を読む市民の手引書となっている。継続的に講座が続くようにと、県職員、市職員、住友社員、市民に講師を依頼したのが17点である。先生が生徒で、生徒が先生となる生涯学習を目指す、現実には理想どおりには運ばない。

## ② 歎喜・歎東の護符の解明

むかしから鉱山の坑道のことを「まぶ」と呼んできた。そして別子銅山の坑道は「間符」と書き、石見銀山や佐渡金銀山などでは「間歩」と書いてきた。「間符」と記述するのは、護符であるお札を貼っているからと聞いてきた。

吉岡銅山では、入り口の六本の矢来形の柱は、薬師如来の十二神祇(神将)を表している。別子銅山で薬師如来に当たるものに稲荷大明神を当てている。坑道に入る安全性の確保を医薬仏(十二誓願の一つに除病安樂の願いをたてている)の薬師如来に帰依している。そして、具体的に六本の柱に帰依しているが、薬師如来は視覚的には出てこないが、十二神祇でもって表現している。なお、薬師如来の十二神将の本地仏尊は、十二支に配し、弥勒菩薩、姿勢菩薩、阿弥陀如来、観音菩薩、如意輪観音、虚空菩薩、地藏菩薩、文殊菩薩、大威徳明王、普賢菩薩、大日如来、釈迦如来であり、天照皇大神、八幡大明神、春日大明神、稲荷大明神、山神宮、不動明王とは対応していない。

別子銅山の坑口も、安全確保の帰依を天照皇大神、八幡大明神、春日大明神、山神宮、薬師如来、不動明王の六つの神仏に帰依し六本の柱に護符箱を掲げている。坑夫を薬師如来の位置に立てさせて安全のバリアで取り囲んでいる。そして、別子銅山の繁栄の帰依としては大山積の神に帰依し、坑口の天の丸太中央に一段と大きな護符箱を鳥居の額の位置に掲げている。安全と繁盛という二重の帰依と祈願から大山積の神は二度出て来る。

入り口天の丸太中央——別子銅山の繁栄(正面から)

入り口からの六本——坑夫の安全へのバリア(平面から)

## ③ 古い写真や絵図の解明

別子銅山には、明治の写真帳があり100年前の姿をリアルに伝えている。しかし、現地に行っても石積とレンガ遺構が残っているだけで、旧別子は回復した緑の森に眠っている。明治の写真に写っている建物や構築物を特定した。

又、別子銅山には江戸時代に描かれた絵図も数枚ある。絵図は画法としてデフォルメされていて、現場とは合致しない。書かれている筆文字は読めないのも誰も目を通さない。誰もが興味を持つように筆文字を活字で表記し、絵図に描かれている内容を簡条書きに書き出した。旧別子の谷は、左岸が生産エリアで、右岸が生活エリアと土地の用途によっ

て区分されていた。旧別子は山の彼方の谷間の集落ではなく、生産都市の様相を示していた。東平だけでなく、旧別子も天空の町であった。

近代化後の生産地の四阪島になると土地の用途区分は明確になる。家ノ島が生産エリアで、美濃島が生活エリアである。

#### ④山口誓子の吟行を辿る

昭和32年2月15日に山口誓子は、銅山峰に登って42句を詠んだ。代表作が「大露頭 緒くてそこは 雪積まず」。新居浜市内に当日詠んだ句と後日直した44句のコピーがあった。この中の22句が「句集・方位」に「別子銅山」と題して掲載されている。ただし、3句は直している。44句を詠んだ場所を追っていくと足取りがつかめた。端出場ー第四通洞ー大立坑ー上部立坑ー第一通洞南口ー銅山峰ー第一通洞南口ー上部立坑ー第三通洞ー東平

元の44句を取り上げず、既成の「句集・方位」の22句を解説し、旧別子・銅山峰及び別子銅山そのものを十分に認知せず、詠んだ場所を誤って記述している大学の準教授がいた。どう見ても句と場所が一致しない。山口誓子は、そこは歩いていないから。

新居浜市内にも一次史料がある。

※44句 当初の句は42句、直した句は3句だが、2句を合わせて1句にしている。

42句+3句-1句=44句

#### ⑤広瀬幸平の漢詩を読み下す

広瀬幸平には、30歳の簿領餘事、45歳の鍊石餘響、69歳の偷閑楽事と3つの漢詩集がある。これまでに好みの漢詩を数編読み下したものがあつたが、全編を読み下していない。その時その時の作詩に、幸平の心境が読み取れるのではないかと全編を読み下した。漢詩の素養がないので4年間を要した。

## 2. 二次史料の使い方

### ①別子銅山の第二次泉屋道は使われなかった

別子銅山の運搬路は、第一次から第三次までの3ルートが実<sup>まこと</sup>しやかに言われてきた。「石ヶ休場」を「石ヶ山丈」と似かよった地名を、苦し紛れに当てたから、第三次泉屋道も説明がつかずあやしいままである。

元禄14年の出願に若干の変更を加えて新居浜浦に下る新道は翌年に完成した。宝永元年（元禄だと17年に該当する）12月の別子銅山支配人から銅役人への訴状に「立川銅山の道筋は長尾休場より西裏へ通り来たので、別子銅山の新道は石ヶ休場より東裏に作ったが、立川仲持はせり割の上、橋際までを通るので何とかしてほしい」とある。

「嶺北側から見た立川銅山古図」の立川銅山道に該当する山道が住友鉦山作成の地形図に描かれていた。問題は立川銅山道から住友新道へ立川仲持がどこを通過して入るかである。東平の焼き畑の作業道を通れば問題なく入れる。東平で働いていた人の「遠登志〜東平の生活道(住友新道に当たる)を通らずに旧立川銅山道を通ったことがある」との話

もある。

住友鉱山作成の地形図に、須領道の清滝の南に「石ケ休場」の表記を発見した。「石ケ休場」は一般名詞である。これまでの人は固有名詞と見ていた。長尾(固有名詞)+石ケ休場(一般名詞)で、「長尾の石ケ休場」となる。

### ②別子銅山の第一次泉屋道を特定する

第一次泉屋道を地元の郷土研究者の案内で辿って行くが、最後は田圃の畦に入って行って進めなくなった。寛政5年に写した元禄17年作成絵図を忠実にたどると、現在の生活道である。再度、現地踏査をし、関川の河道変遷を地形から読み取り、常夜燈などを拾っていき、明治41年の地形図に第一次泉屋道を特定する。私有地は動くが、国有地(道路と水路)は動かないのが決め手となる。道路は後から車社会に対応して新設されるから要注意である。

### ③地名の「石ケ山丈」の解明

新居浜の地名の中で難解なのは「端出場」と「石ケ山丈」である。谷有二の「山の名前の謎解き辞典」(青春文庫)に、伊豆に「発端丈山」があり山崩れの山だと地名から見抜いていた。「ジョウ」は、崖地、崩落地形を指す。「丈」「城」の漢字を当てる。石ケ山丈もV字谷に刻まれた石ケ山の崖地である。

炭が燃え尽きて灰になることを「ジョウになる」という。能でいう翁を「尉」というところからである。翁は黒髪から白髪に変わっていく。黒い炭が白い灰になる。焼き固まった炭も燃え尽きると白くなり、何かの衝撃が加わると崩れるので「ジョウ」が崖地、崩落地形の意味となる。風呂沸かしや炊飯を焚き木でしていた子供のころには、燃え尽きて灰になったのを「ジョウになった」と言っていた。

### ④立川銅山の中宿の位置の特定

別子銅山の中宿は立川にある。立川銅山の中宿が特定できないから、嶺北の立川銅山と中須賀の立川銅山口屋を結ぶ立川銅山が使用した道は迷走して考察している。千葉誉好編の「新居郡・宇摩郡 天領二十九箇所村明細帳―土居大庄屋加地家文書」の種子川村の項に「立川村に別子銅山と立川銅山の中宿があり、双方へ年貢米を一里半の距離を出している」とある。同距離だから立川銅山中宿は別子銅山中宿の近くにあった。別子銅山の開坑は立川銅山の後だから、別子銅山の中宿は立川本村の対岸になった。

### ⑤横たえた梯子をまたげない

明治の別子騒動の時に、ヤマを降りてきた坑夫たちは、国道に横たえられた梯子を越えられなくて撤退した話がある。別子山村で百歳になった祖母から横たえた梯子はまたげないとの話を聞いた人がいる。

漢字の『「降」コウ、くだる、ふる 「陟」チョウ、のぼる、すすむ、たかい』の偏の「阝」は、天上の神が昇降する際の階段、梯子を示している。「降」は、神が階段、梯子を歩いて降りてくる意味の漢字である。神が神梯を降ることを降という。「陟」は、神が階段、梯子を歩いて登っていく意味の漢字である。

梯子は神様が登り降りする神聖な器具であるために人はまたげないのである。運動会の障害競走で梯子を越えずに、その中をくぐるのは名残と考えられる。

- ①梯子をまたぐ姿勢は、梯子から転落している姿勢になるから。
- ②梯子は、神が昇り降りする神聖な用具だから。
- ③梅原猛「森の思想が人類を救う」(小学館)のP53に「柱は、そこをって神々や人間たちがゆききする神聖なもの。――伊勢神宮の御遷宮の初めは心の御柱の建造から始まります。諏訪神社には御柱の大祭があります。金沢の近森遺跡や能登半島の真脇遺跡のウッドサークル(環状列木)を見て、それらの意味が分かりました。」
- ④川添登「民と神の住まい」に、伊勢神宮の心の御柱は、床の下に立っている直径約30cm 長さ約1.8mの檜の棒である。明治4年に新政府によって伊勢神宮の大改革がされる前には、諸行事で正殿の床下に神官が入って、心の御柱の前で祭儀が執り行われていた。日本書紀の崇神、垂仁の条に見えるヒモロギではないか。石を敷きつめたシキ、榊を指す説と持ち運びできる逗子説があるヒモロギは神の依り代である。ヤマトヒメがアマテラスを奉戴して五十鈴川のほとりの巖櫃のもとにまつ。巖櫃とは神聖な櫃の木である。心の御柱は、神社建築がなかった時代の神の依り代と思う。

|    |     |    |   |         |
|----|-----|----|---|---------|
| 柱  | ハシラ | 垂直 | → | エレベーター  |
| 橋  | ハシ  | 水平 | → | 動く歩道    |
| 梯子 | ハシコ | 斜め | → | エスカレーター |

ハシラ、ハシ、ハシゴ。ハシが共通部。柱は立木で天と地を結ぶ通路。天から木の先に降臨し、元から末に登り天に向かう。木を伐採して任意の場所に定める。木を倒して端と端に渡すと橋。木を立て掛けると梯子。

日本書紀には神々が柱を通じて天地をゆききしていたとある。古事記に出て来る天の浮橋も天地をゆきかう橋であった。京都の天の橋立は、昔には天に聳えて立っていたという。その橋立を通して神も人間も往来していたが、ある日神様が居眠りしていた間にドスンと橋が倒れて、今のように横たわっているとの神話が丹後風土記に記されている。

播磨国風土記に「石の橋あり。伝へていへらく、上古の時、此の橋天に至り、八十

人衆、上り下り往来ひき。故、八十橋といふ。」とある石の橋は石段のことである。

橋はもともとは梯子や階段と同じであった。和歌などに出てくる石橋は浅瀬に並べた飛石である。端と端に板を渡したものは打橋という仮橋である。万葉集に「川の上つ瀬に石橋渡し、下つ瀬に打橋渡す。」とある。ハシの古代日本語は橋であると同時に階であり、梯であった。キザハシ、キダハシが元で、キザは刻むのキザで、キダは

段である。一本の丸太に足がかりのための刻みを入れたものが原型である。

(上田篤「橋と日本人」岩波新書)

#### ⑥清水総右衛門が開いた土地の所在

別子鉱山鉄道が敷設されている浜堤とその海側が、西惣開、東惣開であり、広瀬幸平が惣開の記碑で書いている清水総右衛門が干拓した新田面積は4町7段3畝で、東惣開の面積は約4.5町であるので、清水総右衛門が干拓したのは「東惣開」である。

清水総右衛門が干拓した嘉永年間より90年前の宝暦14年(1764)以後の新居浜浦惣改帳の記録に出てくる「惣開」は、「西惣開」と「寄合新田の一部」であった。

また、新居浜郷土史談69号に、「惣開の地名について」で、明治5年以後の土地制度で惣右衛門新田が公簿に680番地、681番地と出ている。そして、昭和2年に東惣開に編入されている。

「若宮のふるさと誌」には、寛文5年(1665)～享保12年(1727)で東惣開、西惣開の畑を完成したとあるので、資料の確認のために不動庵物語に当たった。

新居浜浦惣改帳の記録は、

|            |      |          |         |
|------------|------|----------|---------|
| 寛文3年～12年   | 寄合新田 | 1町6反7畝9歩 | 1.679町  |
| 寛文9年～享保12年 | 惣開畑  | 14町4畝9歩  | 14.049町 |
|            | 合計   |          | 15.722町 |

小字図

|      |       |
|------|-------|
| 寄合新田 | 8.6町  |
| 西惣開  | 6.9町  |
| 合計   | 15.5町 |

「若宮のふるさと誌」説だと小字の東惣開・西惣開の面積11.4町は新居浜浦惣改帳面積14.049町より2.649町も狭い。新居浜浦惣改帳の寄合新田と惣開面積15.722町が、小字図の寄合新田と惣開面積15.5町とほぼ同じである。惣開の地名は「65年間にわたり寄合で開いた、総がかりで開いた」考えられるので、寄合新田と西惣開を併せて考えると意味合いも合致する。(金子新田の干拓は、400年前の天正の頃に今在家の塩崎播磨守が干拓した。また350年前の万治2年に神戸の楠の塩崎利右衛門が干拓したと2説がある。これは道前を開発した干拓の技能集団の塩崎氏が今在家→檜木→洲之内→楠→金子新田との移動が考えられ、今在家時代と楠時代の2回にわたって金子新田を開いたと考える。)

**惣開の碑**: 嘉永年間(1848～1854)に別子支配人の清水総右衛門が新田開発した土地で、その名にちなんで惣開と命名されたとも言われるが、惣開の地名はそれより前の宝暦14年(1764)から記録に出てくる。碑は明治23年(1890)に、別子開坑200年を記念して建立された。碑文は広瀬幸平の撰により、書は高橋泥舟による。住友化学資料館横に由来を記す碑が立っている。

## 總開之記

伊豫國別子鑛山の分店はもと新居濱本村にあり。嘉永年間其店長を清水總右衛門といふ。

課餘かよ好く釣遊ちようゆうを為す。一日見る處あり、

洲渚すしよ卑湿ひしつの地を開墾して四町七段三畝の良田を得たり。乃余すなわちに就もとづきて其名を需もとむ。

余日いわく求めずして名あり總右衛門新開是なりと、後約して總開といふ。且つ是地や南鑛山

を負ひ、北海灣に臨み最もつとも舟車しゅうしゃに便なり。是を以て明治十六年溶鑛試験所を此に設け二

十二年分店を此に移し開明の新機器そなを具へて溶鑛改良の試験を為し遂に今日の良果を得た

り。曾すなわち本年別子山創業の二百年に際し復また此に其慶事を舉ぐ。因よつて窃せつに謂へらく總

開の二字は初め偶然に発すると雖も一は鑛山の全事業を總合するの兆をなし、一は溶鑛の

新機器を開成するの基もとを為す、然らば則すなわち總開の名果して偶然ならざるものあり。亦奇

ならずや、抑おおしてまた又總右衛門主家に盡つくすの誠心けんかい顯晦へんを以て變せず、是今日の良謀を遺し

しにあらざるなきを得むや。

明治二十三年五月 二百年祭の日

住友家の總理從六位廣瀬幸平記す

泥舟逸人精一書

### ⑦新居浜市の海岸線の復元

東予地方局職員、新居浜市職員、西条市職員の勉強会で禎瑞干拓をフィールド・ワークするに当たり、旧西条市の干拓の変遷を調べた。字図をベースマップとして、旧河道、自然堤防・浜堤を描き込み、干拓字名を識別した手法で新居浜市の海岸線も復元する。文化年間の伊能忠孝図をオーバーラップしていくと、先人が自然に働きかけ続けた跡が海岸線の後退として現れてきた。

年代別に海岸線を示す。

#### 海岸線

|        |   |
|--------|---|
| 令和6年現在 | 荷内の自然海岸、三喜浜、黒浜、東部団地、垣生山、垣生沢津海   |
| 2000年代 | 清水漁港、菊本・大江・西原・惣開の工場敷地、御代島、惣開・磯浦の工場敷地でほとんどが人工海岸である。荷内、黒島、垣生山、御代島に一部自然海岸が残っている。 |
| 戦前     | 惣開製錬所の建設、地方後策の推進を契機として、新居浜港   |

- 1900年代 を中心にして、国領川以西に工業敷地として埋立が続く。
- 文化の伊能忠孝図 荷内海岸、多喜浜塩田、垣生塩田(前浜・弁財天浜)と続き、黒島
- 1800年代 は離島である。垣生・沢津・新居浜浦・磯浦は自然海岸のまま、  
国領川の流砂が新居浜浦地先に形成されている。すでに金子新田は  
開発されている。御代島は干潮時に現れる陸繋島である。
- 干拓・塩田以前 伊能忠孝図から干拓・塩田の字を除く。多喜浜塩田、垣生塩田
- 1650年代 (前浜・弁財天浜)、松神子・垣生・沢津・尻無川河口部・金子新田  
の干拓地を除く。
- 縄文海進 7000年前の縄文海進が4m～5mで、昭和21年12月21日の
- BC5000年代 南海地震での沈下が30cmだから、ハザードマップの津波の浸水  
5mのライン縄文海進ラインである。

次に塩田を見ていく。

### 塩田

- 名古屋呂塩田 正徳6年(1716)に開発されたが、浜堤上の揚げ浜塩田であったので、入  
り浜塩田が主になってきて早くに廃止された。字塩浜跡と考えられる。
- 垣生塩田 南を前浜、北を弁財天浜という。設立年代は不明であるが、慶長年間  
(1596～1614)に運上を上納はじめるが、前浜は江戸末には廃止、弁財天  
浜は明治末に廃止される。前浜は字前浜が考えられる。弁財天浜は、字  
弁財天、字中村新開、字裏新開が考えられる。
- 多喜浜塩田 享保9年(1724)に天野喜四郎らによって開発された。古浜・東浜・久具  
浜・北浜・沖浜と継続的に築造されて本邦有数の塩田となる。久具浜の  
西部の用水が可能な範囲は広く水田となる(水田は字イノ坪の坪表記  
で塩田は字五番浜跡の浜跡表記)。昭和34年(1959)に国策により廃止  
される。字多一番浜など。

海岸部の地名を見ていくと海が見えてくる

### 地名

- 阿島 阿島川の下流部は海水が遡上して島のように見えた。「阿」は名の上につけて  
親しみを込めて呼ぶときに使うので、島に親しみを込めた用法となる。「阿」  
には岸の意味もある。
- 多喜浜 入り浜式塩田の多喜浜塩田による。汐留めに成功して多くの人が喜んだとこ  
ろからの命名説と多良尾介之丞と天野喜四郎の名前からの説がある。煮るこ  
とを炊くともいうので、塩を炊く浜からタキハマかもしれない。
- 楠崎 柳川と役所川の堆積作用で海に突き出した地形なので「崎」の字が付く。
- 松神子 神功皇后の三韓へ向かうときに、遅れた皇子を待たせた土地。待皇子。
- 田之上 田圃面よりも上に出た微高地。
- 垣生 埴土を産する土地の埴生を垣生と誤記したと言われている。波生で波間に土

地が生まれてきた干拓を示しているかもしれない。

- 浮島 満潮になっても砂堆が海面に浮いたように見えたから。駿河湾の浮島ヶ原が有名である。
- 宇高 ウダ・ムダは沼とか沢という意味で、宇高は沼沢地の微高地になる。
- 沢津 沼沢がある所。津は川舟の進発するところなので、国領川に橋がない時代には渡し船があったと考えられる。現在は工業用水をくみ上げていて表流水がないが、それ以前には表流水があった。加茂川も江戸時代には渡し舟で渡っていた。
- 清水 国領川の伏流水が清水としてわき出していた所。伏流水の下に海水が潜り込み、上の真水を押し上げて自噴水となる。
- 菊本 国領川の河口の三角州に字大島があり、その沖側に字菊本がある。三角州の地名だが菊本の命名は不明。
- 尻無川 河口が沿岸流の流砂で塞がれた川。
- 新須賀 「須賀」は砂地を表す。国領川が城下から北に広く氾濫して新しい砂地を形成した。国領川東の桜木町あたりまでが新須賀で原地と称して砂地の畑地が広がっていた。国領川の河道改修で新須賀村の中央を流下させた。両岸に霞堤の痕跡が残る。
- 元塚 従来は「元須賀」であった。国領川を開発していった起点にあたる。
- 東須賀 新居浜浦の浜堤の東部の砂地。
- 揚須賀 尻無川の河口部を塞いだ流砂を攫えて揚げた個所。
- 中須賀 新居浜浦の浜堤の中部の砂地。
- 葛淵 葛の元は葛籠で、津倉がなまって「つづら」となったと言われている。荘園の納米を船積みに便利なように港に設けた管理保管倉庫が津倉である。
- 大江 新居浜浦の北側に大きな砂堆があり高洲と呼ばれ向新田として開発される。御代島へは沈降トンボロの洲首があり、尻無川も高州にそって西に流れ大きな入り江を形成していた所から大江と称した。花園商店街の西町側に大江座があった。ふれあい広場に字東大江があり、中須賀二丁目に字大江がある。
- 西原 新居浜浦の浜堤の西部の原地。
- 江口 東川の河口の土地。
- 惣開 総出で開いた土地。
- 星越 海面が干しあがった時に海岸伝いに越えた所。磯浦郵便局当たりを示したが、王子山を越えて山田が星越町になった。
- 黒岩 金子新田を干拓する時に黒岩の山の土で埋め立てた。黒岩は住友倶楽部の東北の隅にあったが、フジツボが付いたまま埋め立てられた。
- 磯浦 磯海岸の箇所。
- 岩鍋 海水を煮詰めて塩を作る時の鍋は鉄だと錆びるので、小石を粘土でくっつけ

た石の鍋を使う。塩を作っていた箇所と考えられる。

現時点で干拓地の字名を拾っていくと、塩田と干拓地エリアが浮かび上がってくる。黒島と垣生山の間は浅海には、多喜浜塩田と垣生の前浜塩田がある。松神子には干拓地が認められる。垣生山の西には4本の砂堆があり、弁財天浜の塩田と干拓地が認められる。沢津は沼沢地由来の地名であり、国領川河口の砂堆と旧河道が途切れた旧県道以北が干拓地と考えられる。国領川河口は、本流の西に下ノ川、川田は分流した旧河道の開発地で、高丸、高丸ノ西、治佐開、大島、菊本は中州を形成している。菊本の砂堆は西に延びて向新田となる。尻無川河口部も砂堆で塞がり、葛淵に見られるように沼沢地となり東口新田・中新開として開発されている。新居浜浦の浜堤は元須賀から西原に延び、磯浦から3本の浜堤で入り江を形成し、砂地や浅瀬が江戸前期の干拓ラッシュの中で新田開発されていった。

新居浜平野を鳥瞰すると、中央構造線の三角末端面下に複合扇状地を形成し、城下と真光寺山の間を流れ下った国領川がデルタ・ファンとして沖積平野を形成したことが旧河道から読み取れる。東川は国領川のデルタ・ファンの西端を流下してラグーンに流れ込む。そして旧河道の川尻は、かつての海へ消えていった。田之上、宇高、桜木、東雲・小松原、新須賀、久保田の自然堤防がその間に微高地を形成している。旧西条市の干拓地の考察ではハザードマップの高潮5mのラインが干拓以前の旧海岸線であったが、新居浜市ではハザードマップの津波浸水5mのラインの前面が干拓以前の旧海岸線である。郷山と金子山丘陵の南に形成された扇状地の開析と大島・黒島・垣生・御代島による離岸流の浜堤・砂嘴形成が影響しているようである。加茂川と中山川は狭隘部を持たずに瀬戸内海に流れ込んでいる。

新居浜市の海岸線の特徴は、塩田と別子銅山の臨海部での製錬を契機として港湾の建設と工場敷地の埋立による陸化である。人々の経済力と技術力が蓄積され、自然への働きかけが可能となると生産エリアの拡張として塩田、干拓地、埋立地が広がっていった。

### 3. 一次史料の読み直し

#### ①新居浜市鳥瞰図の作成年を特定する

昭和55年刊行の新居浜市史には、昭和15年の新居浜市鳥瞰図と掲載されている。図に描かれている建物と、まだ描かれていない建物の建設年を追って絞り込んでいくと、昭和27年に市制施行25周年を記念して作成されたことが分かった。地方後策策が着実に進み躍進新居浜が実現していつていることを表現している。昭和14年決定の都市計画道路が描き込まれていて、時間が二重構造になっている。市長の白石捷一は、父の誉二郎と大石厩一と鷲尾勘解治の夢をビジュアルに見せている。

### 4. 広域で見る

#### ①武国凝別命は伊曾乃神社の祭神など

武国凝別命は、新居、宇摩、周桑郡を治め、その子孫の加禰古乃別君、龍古別君、意伊古別君が統治する。龍古別君は龍河神社の祭神、意伊古別君は新高神社の祭神として祀られ、

尊い縁故にから「ワケノコ」呼ばれていたが、後に音読みして「ベッシ」となり、別子山村に名を留める。しかし、新居浜市内では、武国凝別命と加禰古乃別君の所在が語られてこなかった。

武国凝別命は、西条市の伊曾乃神社の祭神、加禰古乃別君は飯岡の岡古墳の祭神の説がある。弥須古別君、波夜古別君、猿古別君、水別命、十城別君、大笠別(命)、津守別命が、西条市の玉津、飯岡で確認されている。

## ②白水丸の購入

広瀬幸平の「半世物語」では、ルイ・ラロックのために汽船を購入したと書かれている。生野書院の知人から「仏蘭西学研究」39号の白井智子氏の論文が送付され、白水丸の購入は、コワニェに別子銅山を視察に来てもらうためであったことが判明した。

## おわりに

新居浜市役所に49年間勤務した。勤務初年の夏、伊藤玉男さんに旧別子を案内されて、新居浜市の原点を見たとの思いが強く刻み込まれた。近世以降は、別子銅山の歴史そのものが新居浜市の歴史となっているのを痛感した半世紀でもあった。別子銅山を知らなければ、ここでは仕事ができないとの思いから、別子銅山史をライフワークの一つにした。もう一つはね日本文化論である。ここ40年間に活字化されたものは、ほぼ目を通した。書斎の本棚には1002点の本とコピーした資料がある。

別子銅山は世界的な鉱山であり、それだけ大きなテーマなので、いろいろとリライトされて来ている分間違っても再生産されて来ている。精読しないと正誤が判明しない。歴史の記述は基本的な史料である一次史料に基づいて記述しなければならないのが原則であるので、住友史料館所蔵の一次史料が使えないという致命的な限界がある。しかし、出版された書籍を地元から読んでいくと新たに見えてくる箇所がある。

海岸に生まれた関係からか、多喜浜塩田と金子新田も一時紐解いた。地元の資料を漁り工業化以前の人々のオランダ人魂を彷彿させる国土拡大のバイタリティーを垣間見た。

民俗学の本を読んでいたら、中央の研究者が地方の行事を全国的に解明したり、地方の行事の報告から難解な行事の呼び名が解かれている。知識力の向こうに思考力があると言える。地域研究においては、ローカルにしてグローバル、グローバルにしてローカルとの思考の縮尺が大切である。

令和6年の海岸線

戦前の海岸線

伊能忠孝図の海岸線

干拓・塩田以前の海岸線

縄文海進(推定)

名古屋呂塩田垣生塩田・弁財天浜垣生塩田・前浜多喜浜塩田

清水総右衛門開発の東惣開

令和6年の海岸線

戦前の海岸線

伊能忠孝図の海岸線

干拓・塩田以前の海岸線

縄文海進(推定)

名古屋呂塩田垣生塩田・弁財天浜垣生塩田・前浜多喜浜塩田

清水総右衛門開発の東惣開

新居浜市の海岸線の変遷

令和6年の海岸線

戦前の海岸線

伊能忠孝図の海岸線

干拓・塩田以前の海岸線

縄文海進(推定)

新居浜市の海岸線の変遷

塩田等の位置—1

塩田等の位置—2